

【10】マスコミの日本語

近年のネット文化と TV の影響でしょうか、若者を中心に日本語が変化してきて、伝統的な文法に合わない言葉づかいやカタカナ系の新語が次々と登場し、高齢者はついていけません。言葉は時代とともに変化するのは当然の現象ですから、この流れを良いとも悪いとも申し上げませんが、少々気になるのは、元来、社会の木鐸（ぼくたく）たるマスコミの言葉遣いです。

かつて、新聞やTV（とくに NHK）の文章は、現代日本語の模範で国語学習の手本とされ、新聞の論説は教科書に乗ったり、書き写したりすることもありました。とくにニュース記事は、5つの W（ who, what, when, where, why ）と1つの H（ how ）は不可欠の項目とされ、私たちは中学時代に教わりましたが、現代のニュースは新聞、TVとも、これを完全に満足しているものは少なくなりました。中学生のつくる学級新聞の方がはるかに正統的です。現代社会は、別に政治家相手になくても付度すべき事項が多くて、記事を書く苦労もわからなくはないですが、主語をボカすことが増えました。“このたび〇〇〇〇であることが分かった”という文章も多いのですが、これでは世間がわかったのか、新聞社がわかったのか、新聞記者がわかったのかよくわかりません。

他にも、私の気に入らないマスコミの言葉づかいを紹介します。

“ 運転を見合わせている。 ”

電車が災害や事故で運転を中止せざるを得ないとき、こういう云い方をすることが増えました。私の感じではマスコミが云い出して、現在は鉄道会社自体も使うようになったように思います。元来、「運転休止」とか「運転中止」とか言うべきで、 “ 見合わせる ” は情緒的すぎます。

“ 亡くなっていたことが分かった。 ”

これはマスコミの弁解にすぎず、とくに遺族が内密にしていたのでなければ、死亡日と報道日とが少々ずれたって一般の読者には関係ありません。“〇月〇日に亡くなりました”で済むはずです。この言い方は、誰がわかったのか主語が無いのでかえっておかしいのです。

“ 私が〇〇した事に間違いありません。 ”

犯罪の容疑者が自白した時の報道の定番になってしまいました。警察の発表をそのままの形で伝えているだけで、そこに記者自身の言葉が無いのです。聞き始めの頃はそんなものかと思っていましたが、この頃のように10人が10人このように白状すると伝えられると、警察が無理やり言わせているのではと誤解される心配すら生じます。